



▲玉川上水通船模型(中央図書館所蔵)

3 2年間だけ船が通りました

武蔵野新田の農民たちは、江戸へ作物や薪炭を運んで収入を得ていましたが、江戸時代の後半になると、人馬よりも輸送力のある船を玉川上水に通したいという要望が高まってきました。明治3年から5年まで、上水の通船が実現します。

満開の小金井桜の間を下っていく船からの光景は、さぞかしすばらしかったことでしょう。船の長さは10.9メートル、幅は1.6メートルの大きさで、約2トンもの荷物を積むことができました。四谷大木戸までの行きは、流れて沿って下るだけです。砂利、野菜、炭、まき、茶、たばこ、ぶどうなどの産物を運びました。四谷大木戸からの帰りは、米、塩、魚類などの生活物資を載せて、船に綱をつけ、2人が岸から引っ張りながら上って行きました。多いときでは104艘もの船が行き来して

いました。荷物を運ぶだけでなく、旅客を乗せることもあり、利用者はかなり多かったようです。

わずか2年間で通船が禁止されたのは、船が増えて上水が不潔になるという理由からです。もともと江戸時代から、飲料水である上水が汚れては困るという理由で、通船は許可されていなかったのですが、明治維新の動乱の中で、有力な名主たちによる多額の献金によって、2年間ですが、許可されました。

その後も通船の再興運動は、明治16年ごろまで繰り返されました。当時の人たちにとって、通船は、物資の流通とともに、生活を豊かにして、近代化までもたらしてくれるものだったのです。

物流手段を確保したいという思いは、明治5年(1872年)、日本で初めての鉄道が開通すると、鉄道輸送へと変わっていきます。玉川上水の近くに鉄道を通そうという願いが実現し、ようやく明治22年(1889年)、甲武鉄道(今のJR中央線、新宿~立川間)が開通し、多摩に近代交通の夜明けが訪れました。



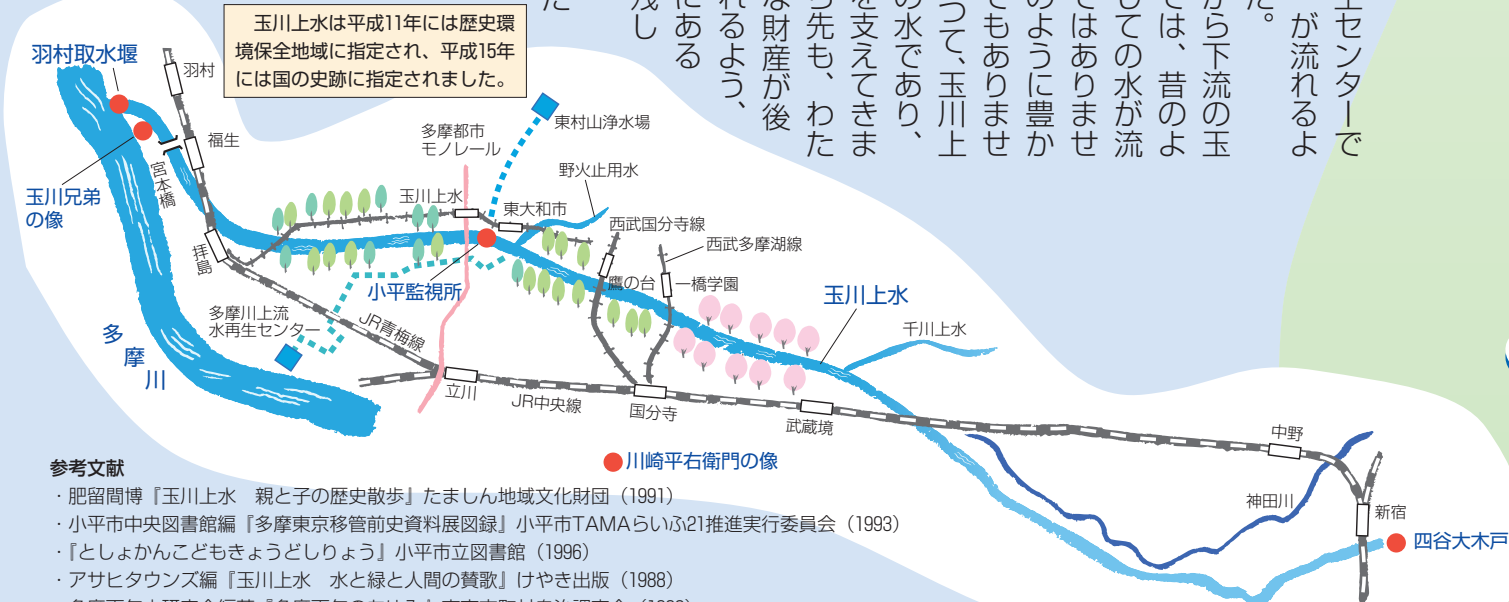
▲多摩東京移管前史資料展図録より



▲羽村取水堰付近



▲鷹の台駅付近



小川村開拓350年

明暦2年(1656年)に小川村(小平市で最初に開かれた村)の開拓が始まって、昨年で350年になりました。約350年前、小川九郎兵衛が新田開発に乗り出すことができたのは、何よりも、承応2年(1653年)の玉川上水の開削があったからだと言われています。玉川上水は、これまで、どのような歴史をたどってきたのでしょうか。その一部を紹介します。

1 当時では世界一の規模の水道でした

3代将軍、徳川家光が参勤交代の制度を確立させると、江戸の人口は急増し、それまでの水道だけでは、飲料水が足りなくなってしまうようになりました。承応元年(1652年)、江戸幕府は、水量が豊富な多摩川から、江戸に上水を引く計画を立てました。その工事を請け負ったのが玉川庄右衛門、清右衛門の兄弟だと言われています。兄弟は、羽村に取り入れ口を造って多摩川の水を引き、四谷大木戸まで、約43キロメートルもの上水路を完成させました。完成したのは承応2年(1653年)です。当時の水道としては世界一の規模で、幕末から明治初めにかけて日本に来た外国人を驚かせたのが、奈良の大仏と玉川上水であったと言われていたほどです。

夜に測量を行い、束にした線香やちようちんの明かりを利用して、土地の高低差を調べたという言い伝えもあります。とてもたいへんな作業だったことでしょう。しかも、測量の結果、羽村から四谷大木戸までの標高差はわずか約92メートルしかなく、自然のこう配を利用して水が流れるように掘っていくのは、たいへん難しい工事でした。それにもかかわらず、機械のない時代に、このような工事を8か月という短期間で完成させたのは、すばらしい技術であったと想像できます。

江戸幕府からこの兄弟に与えられた工事費用は、「徳川実紀」という江戸幕府の記録によると7千5百両でしたが、途中で使い果たしてしまい、私財を売ってお金を作り、工事を完成させたようです。その功績により玉川という姓を名づけることを許され、また、毎年2百石を与えられ、玉川上水を守る仕事を任せられました。



玉川兄弟の像(羽村市)

玉川上水の歴史

2 一大観光地だった、小金井の桜

元文2年(1737年)、川崎平右衛門は、小金井橋を中心とした喜平橋から新し橋までの玉川上水の両岸、東西4キロメートルに数多くの桜を植えさせました。植えた理由は、桜が根を張って堤を守る、花見客で堤が踏み固められて崩れを防ぐ、桜の花が上水に落ちると解毒の効果がある、ということがあげられています。これは、言うならば、今で言う地域開発であり、当時の農民を救う政策だったということです。

小平市は、小川村のほかはすべて、享保のころに開拓された村(新田)から成り立っています。享保7年(1722年)、全国に新田開発を進める高札が日本橋に立てられました。もともと米の生産を増やす目的だったのですが、武蔵野の土地は稲作には適していなかったで、ほとんどが畑作新田となりました。しかし、水が乏しく肥料分の少ない畑だったうえに、凶作が続いて、逃げ出す農民も多く、飢え死にする人さえいました。そんな中、川崎平右衛門が武蔵野の新田世話役となり、作物の作り方の指導などを任せられました。

桜が植えられたのもこのころで、植樹は、川崎平右衛門が考えた農民に対する生活安定策の一つだったのです。おかげで、文化・文政のころ(1804年~1830年)になると、江戸一番の桜

川崎平右衛門の像(府中市郷土の森)

元禄7年(1694年)生まれ、押立村(今の府中市)の名主。武蔵野新田での働きを認められ南北武蔵野新田世話役となり、村々の復興・救済に尽力し、さらに代官としても活躍し、人々に敬慕された。明和4年(1767年)、73歳で没した。



▲東部の桜(たましん地域文化財団所蔵)



▲小金井の桜(たましん地域文化財団所蔵)

の名所として知れ渡るようになりました。上水沿岸の農民たちは、花見客に座敷を開放したり、茶店を出したりして、それらで得た賃金は、農民たちにとって大きな収入となりました。小金井橋のもとには柏屋(花見茶屋)があり、この辺り一番の茶屋となり、柏屋の前の堤はたいへんにぎわいでした。

明治時代になっても堤はたくさんの花見客でにぎわい、1日6万人もの観光客が訪れていたことさえあるそうです。料理屋や休憩所が、上水の両岸にすずりと並びました。

昭和の初めごろになると、このような華やかさも失われてきたようです。現在は、季節を問わず小平グリーンロードの一部として、多くの方に親しまれています。



▲歌川広重画「三十景 武蔵小金井(たましん地域文化財団所蔵)」